

伝統を絶やさないために 次の世代へバトンをつなぐ――

漕ぐ距離や人数、場所は変わっても現代まで受け継がれてきた競舟。しかし、漕ぎ手不足により再び存続が危ぶまれています。そんな中でも「競舟という伝統を後世に残していきたい」という思いを胸に立ち上がった人たちがいます。その一人の新立豊さんに話を聞きました。



新立豊 さん（大泊）



↑相生市から寄贈されたドラゴンボート。ことしの競舟大会でお披露目も兼ねて津奈木海龍がデモンストレーションを実施し、新立さんもメンバーとして舟を漕ぎました。

今でも鮮明に思い出す 競舟の記憶

小学4年生頃から乗り始め、今でも舟を漕いでいます。若い頃は競舟に乗って干拓や湯の児に行ったりもしました。当時の私にとっては競舟は盆の風物詩でもあり、遊び道具の一つでもありました。それくらい競舟は慣れ親しまれたものです。盆の時期になり、鐘の音が聞こえてくるとすぐワクワクしています。以前は漕ぎ手も多かったのですが、練習では漕ぎ手は順番待ち。自分が漕ぐ番が来るのを心待ちにしていたことを今でも覚えています。

競舟文化をつないでいくために

近頃は少子化で町にも若者が少なくなってきました。このままでは競舟の文化が途絶えてしまうのではと感じていました。そんなとき津奈木海龍が大阪の全国大会に出場したときに知り合った兵庫県相生市の方から「ドラゴンボートの大会をやらなか」と言われ、令和2年に12艇の舟をいただきました。以前から大会の企画はしていましたが、これが大きな転機でした。昨年、町でドラゴンボートの大会を開催するために実行委員会を設立。県外からもチームを呼んで来年6月頃を目途に大会を開催する

計画を進めており、小中学生の部門も作る予定です。今の小中学生はコロナや災害で競舟を知る機会がほとんどありませんでした。大人になってからでは競舟に触れ合うきっかけがなかなか無いのが現状。だからこそ子どもの時期から舟を漕ぐことに慣れ親しんでもらいたいです。競舟の魅力は漕いでるときだけではありません。終わった後は各地区の打ち上げがあり、地区ごとで世代を超えて交流することができず。競舟文化を守っていくことは地域の交流を深めることにもつながります。競舟が少しでも町の活性化の手助けになることを願っています。

江戸時代末から受け継がれてきた競舟。その文化は一度途絶えたこともありました。そんなとき、人びとを立ち上がらせたのは「この伝統を絶やしてはいけない」という思いでした。

伝統を守り、つないでいく――

今では津奈木の盆の風物詩とも言える競舟ですが、現代に受け継がれてくるまでにたくさんの人の努力と行動がありました。「お盆は鐘の音が聞こえてこんととぜんなかとよー」（とぜんなか＝さきみし）新立和市長さんの言葉です。この伝統を絶やすことなく受け継いでいくために、私たちにできることは競舟のことを知り、その思いを次の世代へつないでいくことではないでしょうか。

「カンカンカン」――

この鐘の音がいつまでも津奈木の海に響き渡ることを願って――

【特集】津奈木の海に響く鐘の音（完）――

